

「リハチヨフ航海日誌」から読み解く対馬事件

ビクター・シユマギン

一 はじめに

本稿は「フリゲート艦スベトラーナ号での航海及び極東の艦隊を率いた時期の日誌」【Дневник за период плавания на фрегате Светлана и командования Ескарой на Дальнем Востоке】（以後「リハチヨフ航海日誌」または日誌）に基づき、一八六一年の対馬事件中に指揮を執ったロシア海軍の司令官、イヴァン・フョドロヴィチ・リハチヨフ海軍大佐（後の海軍少将）の思考の過程と行動を明らかにすることにあり、彼の作戦の実践方法とその結果について考察する。この日誌の原書は、同じ内容の手書きとタイプ打ちのものが残っているが、本稿ではタイプ打ちものを引用した。このリハチヨフの日誌は、彼がロシア中国海域艦隊【Эскадра в китайских водах】の司令官であった時に書かれたもので、対馬事件の発端から終焉までの記録を含む。リハチヨフは、対馬での基地建設もしくは覇権掌握を提案しており、その作戦の責任者であった。この日誌は、リハチヨフの観点から対馬作戦が失敗した理由を、彼の視点から分析できる貴重な史料である。この日誌にはリハチヨフの私的な考え方が記録されているが、将来他人の目に触れることを念頭におきながら記述された可能性も無視できない。むしろ、歴史上の重要人物や権力者の書物が後に読まれることはよくあり、リハチヨフは司令官という

立場上、彼の重要な任務に関連する事柄を記録しており、将来自身の行動が再吟味されると考えた可能性が高い。

これまで対馬事件に関し、この日誌を使い広く研究分析した歴史学者には、ボリス・ボルグルツェフ氏と伊藤一哉氏がいるが、対馬事件中のリハチヨフの役割について両者は異なる意見を示す。ボルグルツェフ氏の意見によれば、リハチヨフは素晴らしい士官であり、対馬でロシアの影響を確立する任務を巧妙に果たそうとしたが、ゴシケーヴィチ領事や外務省の援助不足等の理由により実現できなかったとの見方をする。一方、伊藤氏は、リハチヨフの拙劣な行動が失敗の原因となったとの意見を示す。本稿は、ロシアの作戦失敗の原因を述べることに主眼を置いてはいないが、リハチヨフがどのように作戦について説明し、その後の失敗について言及したかという点に着眼しこの日誌を分析する。そして、その観点より、対馬事件の新たな一面を探る。

「リハチヨフ航海日誌」を詳しく読むと、リハチヨフの作戦は計画通りに進んでいかなかったことが分かる。またリハチヨフは作戦失敗の理由をよく述べており、責任転嫁を図っている。事件前の彼はこの計画に非常に積極的であったにもかかわらず、事件中は任務全面において非常に悲観的な捉え方をしていく様子や暗然たる思いを抱いていたことが伝何事においても落胆していく様子や暗然たる思いを抱いていたことが伝

わり、他人を非難する箇所が多くある点はこの日誌の特徴でもある。この記録から、リハチヨフは積極的に任務を遂行しなかったのではないかと推測する。彼がなぜこのような考えや行動に至ったかを説明し、また対馬事件の結果に影響を及ぼすに至ったのか、また彼の失敗の言い分が妥当であるのかそれとも事実に基づくものであるかを検証する。

二 リハチヨフの期待と失望

対馬事件についての先行研究では、リハチヨフが対馬作戦を開始させた者として大きな役割を担ったことが指摘されている。⁽⁵⁾ リハチヨフは早くも、初めて日本（函館）に到着してすぐの一八六〇年四月四日（本稿では全て露暦で日付を記した）に、イギリスが対馬を狙っているためロシアが機先を制すべきとの記述を日誌に残した。⁽⁶⁾ 同年五月二日、彼は函館から大公であり海軍元帥でもある（海軍省総裁）コンスタンチン・ニコラエヴィチに、対馬の基地建設もしくは覇権掌握を目指す旨を提案した。

コンスタンチンはリハチヨフの判断に賛成し、ロシア皇帝（アレクサンドル二世）の合意を得て、外交問題を起こさない限り、対馬に基地を建て、海軍司令官として対馬の藩主と協定を結ぶこと（私的に土地の賃借権を得る事）を命じた。⁽⁷⁾

リハチヨフは、対馬作戦においてロシア海軍基地の建設が最も重要な任務であると考えていたようだが、あまり積極的に任務を果たそうと奮起した様子はない。四月二日には、彼はロシア極東にある港は毎年五ヶ月近く凍結し、海軍の兵站基地とはなりえないため停泊地にするしかないとの報告を、コンスタンチンに送っている。⁽⁸⁾ また事件中に彼は二回しか対馬に来航しておらず（三月二七～二八日と四月一六～一八日の計三泊五日の滞在）、来航時に行われた対馬役人とのロシア海軍基地の建設

や賃借権などについての交渉にも参加しなかった。⁽⁹⁾ 作戦については四月一八日以降ピリリヨフ海軍大佐に一任し、九月一日にピリリヨフ撤退命令を出すまで、何も自ら関わりを持とうとしなかった。時折対馬に他のロシア軍艦を派遣させたが、船長には具体的な命令を出していない。次の四月二日付コンスタンチン宛の報告を読むと、彼がすでに海軍司令官として対馬作戦を成功させることに懐疑的である様子が読み取れる。

「当該訓令では、私の交渉は、決して外交交渉の形を取るべきではなく、先ず最初は我が艦隊と現地権力との私的な取引の形で行われるべきである、と命ぜられておりました。かくして、私に課せられた任務は、私の双肩にかかっております限りにおきましては、ほぼ完全に爲し終えたと看做すことができるであろう、と存じます。残されましたことは、今までに爲したことを強固するための方策を探りただくことを、殿下にお願い申し上げますことだけであろう、と存じます【正式な交渉を江戸で始めること】⁽¹⁰⁾」

この記述は一見肯定的な内容の報告であるように見られるが、日誌を読むと、そうでもないようである。課せられた任務に関し他に打つ手がないという報告であり、後に考察するが、この報告から察せられる以上に、彼自身が対馬作戦の任務遂行に関し一段と懐疑的な見方をしていたことを日誌より知ることができる。

では、対馬撤退を決定した時のリハチヨフの説明を、次の通り日誌から引用する。リハチヨフが一八六一年九月一日にサンクト・オルガ湾で記した日誌の一部であるが、この時にはイギリスが干渉し、すでに対馬作戦が失敗に終わることが明白であった。

「九月六日の」朝の七時に陸へ上がり、そこで八月二四日から二五日までいたホープ海軍大将【イギリス中国派遣艦隊司令官】からの書付を受け取った（中略）我々が対馬の浜辺で土地を占領

したことについての抗議文であった。もしもゴシケーヴィチが江戸に滞在し成功への援助をしていれば、このような結果には至らなかつたであろう。残念だが、今はこの重要な事業を中止するしかない。今までのことはイギリス人にとってすべてが有利に動くだろう。もつとも恐れたことが起きた。あいつら【イギリス人】は、我々が先に対馬を確保した事実を絶対に許さないだろう。ペテルスブルグで大きな抗議運動をするだろう。したがって、我が外務省はこの事業【対馬の件】をできるだけ早く終わらせたいに違いない。

しかし、もし次の事があつたなら違う結果になつていただろう。

①もし六〇年の一二月ではなく、八月か、最も適切な時点で【対馬に軍艦を派遣する】許可が下りていたなら、中国戦争【第二次アヘン戦争】の時に何かできただろう。現時点ではイギリスは大きな事業を進めていないから、我々の行動に気付かないはずはないであろう。②もし同時に外務省が、ゴシケーヴィチもしくは私に江戸で【対馬作戦を成功させるため】活動許可の指図や権限を与えてくれていればよかつた。ゴシケーヴィチは今まで（九月）ペテルスブルグから何の知らせも受けていなかったから、あまり何もできなくても全てが彼のせいではない。その上、彼はこんな政治的な仕事には向いていない。③もしゴシケーヴィチが、対馬に対する日本人の意見を十分に理解できるまで江戸に留まつていればよかつた。④監視の必要があつたように、ゴシケーヴィチにこの事業に注目するだけの意志と能力があればよかつた。⑤それに加え、この重要でずっと注目し続けたいといけない任務を請け負つた後で、カザケーヴィチ【海軍少佐、シベリア艦隊の司令官と沿海州の総督】の指揮下で我々の艦隊全てを沿海州へ連れて行

く命令も受けなければよかつた。私は初めからほとんど成功に希望を見いだせなかつたし、成功に対しては全てビリリョフの才能と自分の運命に任せていた。何もしない方がよかつた。私が与えられた【対馬の役人から私的に基地建設の土地賃借権を得ること】は無駄であり、私が最初に提案したように外交交渉すべきであるとペテルブルグに報告していればよかつた。九月一四日に【ホーブ海軍大将の書付を受け取つてから】一週間後、これを書いているがなかなか落ち着けない。将来の希望を失つたかもしれない。しかも、この事業は私、そしてロシアにとつてどんなに重要である⁽¹⁾でも、中止せざるを得ないことをよく理解している。」

これらのリハチョフの説明によれば、作戦失敗の原因は他人にある。司令官が任務後に失敗に終わった結果について述べる事は意外なことではない。しかし、この説明を詳しくみると、リハチョフは任務に関連した人々の責任と自身に課せられた困難な使命について大げさに表現しているようにみえる。任務に関してだけでなく、極東のロシア海軍についてもリハチョフは全面的に不満であつたことが日誌より見受けられ、深い失意の果てに、失敗の責任を転嫁した表現とみることもできる。リハチョフ自身の性格の考察は本稿の課題ではないが、リハチョフが作戦に對して全面的に悲觀的な意見を持つていたことは日誌の随所から伝わってくる。その上、彼は初めから成功の可能性が低いことも示唆しており、それは本心であつたかもしれない。例えそうでなかつたとしても、彼が任務に際して早い段階（四月）で悲觀しており、その失意がさらに深くなるばかりだつたことは確かだろう。日誌にはそれを裏付ける記録があり、このような心の動きは彼の行動に少なからず影響を与えたであろう。

三 リハチヨフの責任転嫁―上官、同志、外務省

それでは、次に日誌に記されたリハチヨフの説明に関して、それがどれだけ現実に基づいた判断であったのか、また事実とのずれがあるとするれば、事件中のリハチヨフの行動に関してどのような結論を導き出せるのかを分析する。まずは、リハチヨフの人間関係に焦点をあて、考察を進める。

三― 海軍長官及び同志との関係について

リハチヨフが長官のコンスタンチンと親しい関係であったことはよく知られており、リハチヨフが中国海域艦隊の長官に任命される前、コンスタンチンは彼を副官に任命しロシア海軍の近代化に従事させた¹²。しかしながら、「リハチヨフ航海日誌」には、長官が彼に対して陰謀を企てているのではという疑惑や、サンクトペテルブルグに誰も自分の味方がいないという不平が記述されている。

「一八六一年四月七日、上海」昨晚、郵便が来たが、その中には何も大事な知らせがなかった。私はまるでここで死んだのだとペテルブルグで思われているみたいだ。イグナチエフ【清国のロシア公使】のことはとんでもなく褒められているが、私の事は誰も一言も言っていない¹³。

それだけではなく、リハチヨフは自分の敵が海軍省内部を支配しているとき、ええ強調した。

「一八六一年五月二六日、沿海州、ノヴゴロド湾」昨日届いた知らせから、ペテルブルグ（我が海軍省）では、私を最も嫌う人々が力を持ち優勢になってきたことが分かった。カザケーヴィチからも不愉快な知らせが来るだろう¹⁴。

これらの記述からも、リハチヨフは長官らに不信任感を抱いていた様子が読み取れるが、リハチヨフは海軍大佐から海軍少将に昇進している¹⁵。リハチヨフは自分の長官を含め、周りの人々を容易に信用しない思考様式を持っていたと思われる点は重要であろう。

先に引用した九月一四日付の日誌において、リハチヨフは海軍省からの連絡遅延を理由に、使者であったヒトロヴォ陸軍少佐の責任を追及する記述がある¹⁶。彼は同志の行動に対しても不満であったといえよう。確かに、長い間ヒトロヴォが家庭の事情でサンクトペテルブルグを出発せず、コンスタンチンの許可の手紙がリハチヨフに渡るまで約半年がかり¹⁷、結果として対馬への軍艦派遣が遅れたのは、一部ヒトロヴォの責任もあるといえよう。しかし、たとえ連絡が早く来ていたにしろ、軍艦を派遣し任務成功となりえた保証はない。

この時期は一八六〇年の第二次アヘン戦争中であり、当時のリハチヨフの主任務は清国のロシア公使イグナチエフを支援することであった¹⁸。ワジム・クリモフ氏の説明通り、リハチヨフの指揮下にある中国海域艦隊は中国の港町に集結し、イグナチエフを支援していた¹⁹。つまり、ロシアはイギリスやフランスと同じく、中国での戦争に巻き込まれる危険性が低くはなかったのである。このことから、中国海域艦隊からの軍艦を早くに対馬に派遣できたか、また事件がクリミア戦争の五年後のことでロシアとイギリスの関係が逼迫しており、そもそもイギリスが対馬に派遣されるロシア軍艦を見逃す可能性があったかどうか、疑問である。

また、先に引用した一八六一年九月一四日付の記述⁵では、リハチヨフには対馬作戦とカザケーヴィチを支援する命令が下されており、後者のカザケーヴィチの支援が優先されたため彼の軍艦の扱いに制限があったと弁明しているが、その海軍省の一八六〇年一月一四日付（一八六一年四月二日に届く）の命令を引用する。

「来年の」四月に中国との国境でロシアと中国の協議員が合会し、イグナチエフ少将が締結した協約に基づき、国境をウズリ川沿いに定め直す予定である。それ故、リハチヨフ海軍大佐の命令は、艦隊を集め、海軍大佐の判断に従い連れて行ける全ての軍艦を四月の中旬までにノヴゴロド湾へ到着させることである。そこで協議員【カザケーヴィチ】の指揮下に従い滞在し、もし協議員会がウラジオストックへ赴く場合は、そちらへ一隻を派遣すること。⁽²⁰⁾

この引用によれば、「連れて行ける全ての軍艦」とあるので、リハチヨフの軍艦の扱いに制限はあったが、全軍艦を集結せざるをえない状況ではなかった。また、リハチヨフは一八六一年一月にコンスタンチンより、「次の言葉を覚えておけ。スヴェトラナ号【フリゲート艦、リハチヨフの旗艦】はリハチヨフ大佐の直接指揮下にある。その船を好きに使え⁽²¹⁾」との命令を受けていた。当時の軍艦の配置についてであるが、四月の中旬には芋崎沖に停泊していたカザケーヴィチ支援のためのスヴェトラナ号に加え、ナエズドニク号というクリッパー艦及びビリリヨフのボサドニク号の計三艘の中国域艦隊が対馬にいた。⁽²²⁾これは対馬事件中に一番多い軍艦数である。つまり、当時の状況から判断するに、リハチヨフはカザケーヴィチ支援の命令を都合の良いように解釈したと考えられる。また先述の一八六一年九月一日付引用の終わりの方には、作戦は無駄であったと述べるとともに、外交交渉を始めた方がよいという彼の最初の提案を長官や政府が聞き入れなかったことを指摘しているが、⁽²³⁾対馬宛の報告書を読むと、彼は特に外交交渉を勧めていたわけではないことが判明する。この報告では、「個人的な意見を伝える義務があると判断し、申し上げる。この問題を解決できる方法の一つは交渉と平和的な行動で

ある。しかし、それは最も良好な方法ではない。」⁽²⁴⁾とある。実際、リハチヨフは、江戸幕府は不安定な状態にありイギリスからの外圧に弱く交渉相手とはならないため、⁽²⁵⁾一八六一年四月二日付の報告書⁽²⁶⁾以前は外交交渉の必要性を訴えておらず、また直接関与は控えている。つまり、初めから外交交渉を勧めてはいなかったのである。

三―二 外務省、特にゴシケーヴィチとの関係について

これまで、リハチヨフの海軍内の関係を考察してきたが、これより外務省、特にゴシケーヴィチ領事との関係をみていく。「リハチヨフ航海日誌」の中で最も多い非難は、外務省やゴシケーヴィチに対してであり、十分に支援を得られなかったことについてである。その内容は先の九月一日付の②④の引用にも一部見ることができよう。

リハチヨフがゴシケーヴィチを非常に非難している様子からして、ゴシケーヴィチは何かしら対馬作戦について知っていたとの推測でき、少なくとも、ゴシケーヴィチは何か知っていたとリハチヨフが信じていたことが読み取れる。先行研究にも、ゴシケーヴィチがどれほど計画について知っていたのかについて議論がある。クリモフ氏は、ゴシケーヴィチは作戦について何も知らなかったとの意見を示すが、⁽²⁷⁾保田幸一氏はゴシケーヴィチが作戦開始の詳細を知った証拠はないが、知っていた可能性を否定できないと述べている。⁽²⁸⁾日誌には、次の引用通り、リハチヨフがゴシケーヴィチに作戦を伝えたとみられる記録が残っている。

「一八六〇年四月八日、箱館」ゴシケーヴィチは対馬についての意見にほとんど賛成していない。彼は、(中略)日本からイギリスを遠ざけ、我々にイギリスの行動について伝えてもらうのが最良だと考えた。彼は日本人がそれに合意するならば、我々が外交交渉を使ってイギリスの行動を阻止できると期待していた。」⁽²⁹⁾

その九ヶ月後、リハチヨフはポサドニツク号を対馬に派遣する直前、ゴシケーヴィチを連れて江戸に行くことに決めた。出発の前、「一八六一年一月二十八日、長崎」一時にゴシケーヴィチがきた。私は彼に江戸で成すべきことを説明した⁽³⁰⁾との記述を日誌に残す。この記録には、具体的内容は記されていないが、ゴシケーヴィチに作戦を援助してくれという意志を伝えたのではないかと推測する。続いて、三日後リハチヨフは、「一八六一年一月三二日、長崎」朝、ゴシケーヴィチが私の所に来て、こう決めた。すなわち、ゴシケーヴィチはポサドニツクで箱館に行く。すぐその後から、クリッパ艦の一つを箱館に派遣し、ゴシケーヴィチはそれに乗って江戸に行く。ポサドニツクは直ちに特例任務のため、出発する。」と記録した⁽³¹⁾。また次の日「一八六一年二月一日、長崎」ゴシケーヴィチがまた来た。詳細について話し合い、後でその内容を手紙にして彼に渡した。ピリリヨフを呼び、任務を告げ、秘密にしておくように命じた。」とある。これらの記述は、リハチヨフが作戦についてゴシケーヴィチと対話したことを裏付けるものである。

以上、日誌にはゴシケーヴィチとの接触についての記録があるが、日誌の他に、リハチヨフは外務省との関係についてコンスタンチンより説明の手紙を受け取っており、それもゴシケーヴィチに対しての見方に影響を及ぼしたと考える。その手紙は、一八六〇年七月二十六日付の正式な命令文に付随した補助的手紙であり、対馬の作戦が海軍の責任下におかれた経緯と外務省の役割に対しての説明であった。次にこの手紙の一部分（保田氏訳）を引用する。

「私はあなたの上申書を七月二二日（八月三日【西暦】）にゴルチャコフ外相が同席しているところで陛下に読んでさかされました。陛下はそれをただちに理解し、対馬の現実の重要性をすべて理解されました。ゴルチャコフもその重要性を認めないわけ

はないが、ここから政治問題が発生しはしないかと、いつもの癖で心配しています。要するに、このことから日本人との争いになりはしまいかというのです。（中略）ゴルチャコフは、この問題を誰に任せてよいかはつきり判らないと言ひ、イグナチエフに任せることを欲しないと断固として言いました。この席で彼はイグナチエフ「ゴルチャコフか」をこの問題から解放するように私に願ひ、この問題を外交問題としてではなく、純粹に海軍の問題にする。それ故に問題をあなたに一任すると話を結びました。私ももちろん、この展望を非常に喜び、ベターだとすぐに同意しました。」⁽³³⁾

この一件が外務省ではなく海軍の支配下に置かれたのは、ゴシケーヴィチの上役である当時の外務大臣ゴルチャコフがリハチヨフの作戦に賛成しなかったためである⁽³⁴⁾。この補助的手紙には、外務省は明らかに反対の姿勢を示しているというより、慎重であるとの説明がされている。つまり、コンスタンチンはリハチヨフに外務省へ協力を求めないようには言及しておらず、このような説明から、リハチヨフはゴシケーヴィチへ援助を求めても応えてくれるはずと判断していたのではないかと考える。実際、リハチヨフはゴシケーヴィチに援助依頼をしており、彼の願ひ通りにゴシケーヴィチが動かなかったことに苛立ちを示したのではないかとの見方ができる。

では、リハチヨフはゴシケーヴィチにどのような援助をしてもらいたかったのだろうか。彼は対馬についての幕府側の意向を聞きだすように頼んでいると思われる⁽³⁵⁾。そしてゴシケーヴィチは実際にこのため尽力したようである⁽³⁶⁾。しかしながら、リハチヨフはゴシケーヴィチが彼の指示する通りにせず、さらには情報を漏らしたと判断したようであり、腹立たしく感じたことが日記に記されている。一八六一年三月一日付の日

誌には、「**江戸**」ゴシケーヴィイチは夜の八時ごろに来た。この男はうっかり、日本人に対馬のことを話し、箱館では奉行に対馬の地図も見せてしまった。彼はそのようなことをする権利も権限も持っていない」と記されている。⁽³⁷⁾二日後、リハチヨフは、「**江戸**」ゴシケーヴィイチに長い手紙を書き、われわれが今、何をなすべきかを理解させようと努めた。彼の軽率さと口の軽さは非常に心配だ」と書いている。⁽³⁸⁾後にリハチヨフは、ゴシケーヴィイチは江戸に残り、作戦援助に尽力すればよかったと書いている。

リハチヨフのゴシケーヴィイチに対する期待は現実的ではないであろう。ゴシケーヴィイチが幕府の情報を適切に集めなかったと責めることも合理的ではないだろう。⁽³⁹⁾リハチヨフはゴシケーヴィイチ以外にも、幕府の強い抵抗があったことなど、様々な情報を得ていた。⁽⁴⁰⁾また、ゴシケーヴィイチが江戸に残り外務省が外交交渉を始めることを期待すること自体、現実的ではないだろう。リハチヨフは基本的にゴシケーヴィイチの対馬作戦中の役割について誤解したとみられ、コンスタンチンからの補助的手紙が、その誤解を招いた一因であったと考えられる。

四 対馬作戦の行き詰まり

ここでは、リハチヨフがなぜこの様な行動をとったのか、そして責任転嫁の必要性が出てきたのかを検証してみたい。これまでの考察で、リハチヨフは海軍長官及び同志、そして外務省の責任を問うてきたが、彼が周りの人々に頼ることができないと考えていたのであれば、なぜ自身から可能な限り成功に向けて努力しなかったのだろうか。前に引用したコンスタンチン宛の報告書の一八六一年四月では、彼は初めて他に何もすることができないと外務省の援助を頼んでおり、この時の「リハチヨフ航海日誌」には不平が綴られている。この時点でリハチヨフは時間を

潰すことしかできず、彼の精神状態を不安定にさせ、さらには何もできない状況を作り出したのではないかと考える。悪循環の始まりである。リハチヨフは明らかに事の成り行きに満足していなかったことが分かる。この当時の日記をみると、一八六一年三月二八日リハチヨフの第一回対馬来航の時「ピリリヨフの仕事はひどい状況だ。一ヶ月もここにいてのにも成し遂げていない。不必要なほど慎重に、遠慮しすぎて、日本側の言うままになっている。⁽⁴¹⁾」とある。そして四月中旬の第二回目の対馬来航の時には、リハチヨフは進歩がないため江戸で交渉を行うべきと結論付けている。⁽⁴²⁾

以上から、彼は任務に対して不安を抱いたと察せられ、一八六一年五月二六日付の日誌には、「対馬の件も危機的状況になってきている」とある。また、夏にかけて、リハチヨフの悲観性は深まっていく。一八六一年六月二七日の日記には、「**今ピリリヨフは in high spirits**【現状に樂觀的だ】が、それはいつまで続くだろう⁽⁴⁴⁾（後略）」とある。これに続き、一八六一年七月一七日には、彼はカザケーヴィイチ支援の命令を言い訳として使ったと考えられる次の引用を残している。

【**ノヴゴロド湾**】辛い訓練はさらに伸びていく。夏は終わりがけ、時間は無駄に終わる。つまり、したかったことはできなかった。もしここを出ることができたなら、自分の利益のためにも働くことができたかもしれないが、任務【カザケーヴィイチを支援すること】を果たすことができなかったに違いない。それ故、愚かかもしれないが、我慢するしかない。⁽⁴⁵⁾」

リハチヨフの不安は、以後増大していったようである。先に挙げたコンスタンチンの補助的説明の手紙には、対馬作戦の任務終了とともに戻ってくるようにと書かれていた。⁽⁴⁶⁾また一八六一年八月一二日に海軍大臣クラッペよりサンクトペテルブルグへ戻る旨の手紙をリハチヨフは受

(45) 「リハチヨフ航海日誌」から読み解く対馬事件（シュマギン）

け取っているが、彼は「日本の用事【対馬の用事】を未完成のまま見捨てることはできない」と残ることを決めた。⁴⁷対馬作戦が順調に進んでいない中、リハチヨフは新しい方針を取ったり当初の計画を変更したりする手立てが見つからず、ただ現状維持の姿勢を保つのみだったようである。一八六一年八月から九月の初めにかけてのピリリヨフへの命令は、方針の継続でしかない。⁴⁸

そのリハチヨフの状態の原因は、恐らく任務成功に対する自信欠如によるものと考えられる。リハチヨフは、海軍の艦隊が政治力や戦力獲得の手段であり、この点について多くを書き残しているが、ロシアの国益のために中国海域艦隊も使われるべきだと信じていたようである。⁴⁹一八六一年八月から九月にかけて、リハチヨフ自身が対馬作戦に特別関与しなかったのは、指揮下のロシア軍艦だけでは日本を威圧して要求を通すことができず、同時に公式な交渉を行う権威にも欠けていたと考えたからと思われる。

リハチヨフの日記の情報をもとに、次の仮説を挙げる。リハチヨフは自分の指揮下にあるロシア海軍及び海軍の兵站支援に対する信用が非常に低く、どうすることもできなかった、というものである。まず、リハチヨフには信用する部下が一人もいなかったようである。ピリリヨフ大佐を考えてみよう。ボルグルツエヴ氏によると、リハチヨフはピリリヨフを信用していたため対馬の任務を与えた⁵⁰とある。確かに、リハチヨフの正式な海軍報告には、ピリリヨフに対しての批判はあまりない。しかし、彼の日記には、先にも述べた通り、一回目の対馬来航時、彼はピリリヨフに対し満足していない。⁵¹加えて、ピリリヨフを褒める時もリハチヨフは彼のことを批判した。日記には、ピリリヨフが船を整えているとき、「コルベツト【ボサドニツク号】でなかなか良い調子であるが（中略）⁵²私の先入観は別として、ピリリヨフには良い点もある」と書いている。

ピリリヨフに対して「良い点もある」はそこまでよい褒め言葉ではあるまいし、中国域艦隊の部下に対しては、それ以上の批判を示した。

船長や一般水兵に対してのリハチヨフの不満は非常に多かったことが分かる。理由は様々であった。リハチヨフの日記によると、中国海域艦隊は大変汚かったとの記しがある。⁵³しかし最も多い批判は、部下の基本的才能の欠如もしくは訓練不足についてのことである。⁵⁴一八六一年八月一〇日の記録は、この意見を如実に描き出している。

「八月一〇日、ニコラエヴスク」P官【恐らくペシエウロヴ】は才人でいい士官だがリーダーとしてはよくない。何も知らないようだ。【彼の】指揮下にある水兵の態度は最悪だ。軍紀を全く守っていない。まるで汚れた乱れた髪をした農民だ。このようなやつを水兵にするしかないと思うと落ち込んでしまう。我々の苦しみを理解できる人も少ない。⁵⁵

飲酒もよくありそれが原因で大きな問題に発展したという記録も少ない。⁵⁶また艦隊については彼の否定的な意見が多く記され、実に面白い点ではあるが、ここでは割愛する。

他に、ロシア海軍の未熟な兵站支援がリハチヨフの行動を制限した可能性も高い。当時ロシアは沿海州を占領したばかりで、その地域の技術的そして兵站的収容能力は低いものであった。ニコラエヴスクという港町が当時のロシア海軍の主要な基地であった。リハチヨフは日記に、その町の技術発展の遅れと食料不足についての記述を多く残している。

「一八六一年八月一四日、ニコラエヴスク」機械工場で修理する道具は十分ある。しかし、その道具を動かす機械で使えるのは三分の一から七分の一しかない。スチームハンマーがあるが、一切動かない。ダヴィドフがアメリカから輸送した機械鋸機があるが、まだ組み立てていない状態である（中略）悲惨な湿っぽい夏

のせいで新鮮な食材の不足が起こった。家畜の餌不足で家畜を多数始末するしかない（中略）とても来春までは持たないし野菜の熟成が遅いため、夏には塩漬けの物や魚しかない。⁵⁷⁾」
港の兵站機能が不十分であり、さらには社会問題が人々の生活を苦しめたようである。

「一八六一年八月一日、ニコラエヴスク」給料日の後は飲酒が一般的現象であり港では作業が行われず（中略）ウォッカ販売禁止政策は全て廃案になり、町には多くの（何十店も）のウォッカを売る屋台ができた。しかし、それは良いことかもしれない。販売禁止政策は無駄であった。また、全ての値段はウォッカの価格と合わされている。制限が無くなったため、ウォッカの値段が下がり、他の値段も全て下がった。⁵⁸⁾」

このように、極東のロシア海軍の機能は低く、特にロシア沿海州港の支援回路網として大した役割は果たしていなかった。イギリス海軍の中でも、日本の中でもそのことをよく理解していることをリハチョフも知っており、「一八六一年九月二日、箱館」ニコラエヴスクに入ったスクーター艦は我々にとって良くない印象を持って来航した。日本人は、その地域の貧窮の様子を軽蔑している（後略）」と日誌に記している。⁵⁹⁾

以上から、ロシア海軍の艦隊だけでは政治力を示すことにはならず、対馬作戦に対してロシアの思惑通り日本を同意させる手段とはなりえなかった。

五 おわりに

これまで、日記の引用を用いて、リハチョフの思考過程と行動を考察し、リハチョフが見た対馬事件の状態と捉え方、及び作戦失敗に至る原因と彼の言い分についての妥当性を検証してきた。リハチョフは、ロシ

ア艦隊が任務をこなせないと早い段階で自覚し、精神的に不安定になり、判断不可能な状態に陥ってしまったと考える。彼は信用しきれない部下に対馬作戦を行わせ続けた上、作戦が失敗した時、その責任転嫁を試みたと推測する。「リハチョフ航海日誌」は他人に見られることを念頭に置いて記された可能性が高いが、彼の言葉を客観的事実と比べながら対馬事件中の彼の役割について新たな視点を見出すことができる貴重な歴史的史料であろう。この記述から、困難に直面しながら対処を試みた一人の生身の人間が浮き彫り出される。

〔註〕

- (1) 伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』吉川弘文館、二〇〇九年、一六九頁。Российский государственный архив военно-морского флота (далее РГАВМФ). Ф. 16 Оп. 1. Д. 21. Тайп打字РГАВМФ ф. 16. Оп. 1. Д. 22.
- (2) 保田孝一氏も『文久元年の対露外交とシーボルト』のはしがきにこの日誌について言及するが、分析には使っていない。保田孝一氏『文久元年の対露外交とシーボルト』吉備洋学資料研究会、一九九五年三月。
- (3) Болгунов Б. Н. Русский флот на дальнем востоке, 1860-1861. Владивосток, 1995. С. 54.
- (4) 伊藤一哉『ゴシケーヴィチが見た幕末日本（一四）対馬事件（三）』歴史読本、四七（六）（通号七五二）二〇〇二年六月、二四六頁。
- (5) 麓慎一氏も伊藤氏もこの点について述べている。麓慎一「ボサドニツク号事件について：ロシア海軍文書館所蔵Ф410 02.2385を手掛かりに」『東京大学史料編纂所研究紀要』一五、二〇〇五年、一九〇頁。伊藤一哉「ゴシケーヴィチが見た幕末日本（一一）対馬事件（二）」歴史読本、四七（四）（通号七四九）二〇〇二年四月、二二九—二四一頁。
- (6) Болгунов Б. Н. Русский флот на дальнем востоке, 1860-1861. Владивосток, 1996. С. 54-55.

- (7) РГАВМФ Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 7.
- (8) Болгуриев Б.Н. Русский флот на Дальнем востоке, 1860-1861. Владивосток, 1996. С. 121-122.
- (9) РГАВМФ Ф. 410. Оп. 2. Д. 3285. Лл. 306-31, 38-3806.
- (10) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之五二』東京大学史料編纂所、東京大学出版会、二〇一三年、二二八―二二九頁。
- (11) РГАВМФ Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Лл. 259-260.
- (12) Коршунов Ю. Л. Генерал-адмиралы Российского императорского Флота. Санкт-Петербург, 2003. С. 86, 100-101, 165.
- (13) РГАВМФ Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 161.
- (14) Там же. Лл. 190-191.
- (15) 一八六一年八月二日にリハチョフはこの昇進について知らされた。
- (16) РГАВМФ Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Лл. 235-236.
- (17) Там же. Л. 259.
- (18) Болгуриев Б.Н. Русский флот на Дальнем востоке, 1860-1861. Владивосток, 1996. С. 63-64.
- (19) Там же. С. 57.
- (20) クリモフ、ワジム「リハチョフ、イヴァン・フォードロヴィチ(1826-1907)艦隊司令長官、学者、人間」『日露関係史料をめぐる国際研究集会 二〇一三予稿集』東京大学史料編纂所二〇一三年、四七―四八頁。
- (21) Болгуриев Б.Н. Русский флот на Дальнем востоке, 1860-1861. Владивосток, 1996. С. 75-76.
- (22) Там же. С. 69.
- (23) РГАВМФ Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 38.
- (24) РГАВМФ Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 260.
- (25) РГАВМФ Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Лл. 05-0506. 著者訳。麓慎一氏の訳は、「この問題のある程度の解決は、十分満足のいくものではないにしろ、おそらく交渉ないしは平和的な方法によって可能であろう」である。交渉については肯定的であったと解釈できるが、ロシア語の原史料を再読すると、実際にはリハチョフは交渉を勧めてはいない様子であったと解釈できる。麓氏の訳は次より引用。麓慎一「ボサドニック号事件について…ロシア海軍文書館所蔵Ф410. 02. 2385を手掛かりに」『東京大学史料編纂所研究紀要』一五、二〇〇五年、一九〇頁。
- (26) РГАВМФ Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Лл. 03, 0506-06.
- (27) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之五二』東京大学史料編纂所、東京大学出版会、二〇一三年、二二九頁。
- (28) クリモフ、ワジム「最初の駐日ロシア領事、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチ」『東京大学史料編纂所研究紀要』一七、二〇〇七年、二〇八頁。
- (29) 保田氏によると「リハチョフ提督の指示を公然と無視することもできず、適当に聞き流していたとも考えられる」とある。保田孝一氏も『文久元年の対露外交とシーボルト』吉備洋学資料研究会、一九九五年三月、五頁。
- (30) РГАВМФ Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 8.
- (31) Там же. Л. 115.
- (32) 伊藤一哉訳。伊藤一哉「ゴシケヴィチが見た幕末日本(一三) 対馬事件(一)」歴史読本、四七(五)(通号七五〇)二〇〇二年五月、二四五頁。
- (33) 伊藤一哉訳。伊藤一哉「ゴシケヴィチが見た幕末日本(一三) 対馬事件(二)」歴史読本、四七(五)(通号七五〇)二〇〇二年五月、二四五頁。
- (34) 保田孝一『文久元年の対露外交とシーボルト』吉備洋学資料研究会、一九九五年三月、一九八頁。
- (35) 伊藤一哉「ゴシケヴィチが見た幕末日本(二二) 対馬事件(一)」歴史読本、四七(四)(通号七四九)二〇〇二年四月、二四一―二四二頁。保田孝一氏も『文久元年の対露外交とシーボルト』吉備洋学資料研究会、一九九五年三月、五頁。
- (36) 文部省維新史料編纂事務局よれば、ゴシケヴィチは文久元年の初め頃江戸で老中安藤信行に「英國に對馬占領の野望があることを告げ、同島防備の必要を述べて函館に歸つた」とある(文部省維新史料編纂事務局)

- 局『維新史』第二卷、明治書院、一九三九—一九四一。九二四—九二五頁〕。
 ゴシケーヴィイチが老中に何を伝えたかどうかは別としても、リハチョフ
 の日誌より、ゴシケーヴィイチは対馬作戦が始まる前に函館奉行と対馬の
 話をし、対馬の地図を見せた〔PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 142〕。そ
 れ故に、ゴシケーヴィイチは幕府側の代表に対馬に関する意向を聞いたと
 考えられる。
- (36) 伊藤一哉「ゴシケーヴィイチが見た幕末日本（一四）対馬事件（三）」歴
 史読本、四七（六）（通号七五—）二〇〇二年六月、二四二頁。
- (37) PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 142.
- (38) 伊藤一哉訳。伊藤一哉「ゴシケーヴィイチが見た幕末日本（一三）対馬
 事件（二）」歴史読本、四七（五）（通号七五〇）二〇〇二年五月、
 二四五頁。
- (39) PABMΦ Φ. 410. Op. 2. Д. 2385. J. 78, 80.
- (40) ビリリョフの報告など。Tam же. J. 2606, 3206.
- (41) 伊藤一哉訳。伊藤一哉『ロシア人に見た幕末日本』古川弘文館、
 二〇〇九年、一七五頁。
- (42) PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 167.
- (43) Tam же. J. 190.
- (44) Tam же. J. 206.
- (45) Tam же. J. 216.
- (46) Болгулев Б. Н. Русский флот на Дальнем Востоке, 1860-1861.
 Владивосток, 1996. С. 63.
- (47) PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 236.
- (48) PABMΦ Φ. 410. Op. 2. Д. 2385. J. 82-83.
- (49) PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 8. Такифев, Ф. С. (1829-1907) 艦隊司令長官、学者、人間〕
 『日露関係史料をめぐる国際研究集会二〇一三予稿集』東京大学史料編
 纂所二〇一三年、一九—三〇頁。
- (50) Болгулев Б. Н. Русский флот на Дальнем Востоке, 1860-1861.
 Владивосток, 1996. С. 70.
- (51) PABMΦ Φ. 16. Op. 1. Д. 22. J. 157.
- (52) Tam же. J. 168.
- (53) Tam же. J. 40.
- (54) Tam же. J. 207, 209.
- (55) Tam же. J. 232.
- (56) Tam же. J. 172.
- (57) Tam же. J. 241-243.
- (58) Tam же. J. 243.
- (59) Tam же. J. 265.